

フランス語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

最後となった令和2年大学入試センター試験（以後「センター試験」という。）の「フランス語」は、今までの問題形式を踏襲した形で行われた。受験者にとっては、大きな変更もなく、形式の違いで慌てることなく、問題に集中して取り組めたのではないかと思う。

テスト結果は、受験者数121名（前年度102名）、平均得点は100点満点換算で69.20（同69.32）、最高100点、最低24（同100点、17点）という結果であった。得点比率のグラフから見てもおおむね適当な問題であったことが分かる。

受験者数をこの5年間で見ると、140名（平成28年度）→134名（平成29年度）→109名（平成30年度）→102名（平成31年度）→121名（令和2年度）となっている。受験者数はここ2年ほど100名をやっと超す数で推移していたが、今年は昨年より2割ほど増えた。高等学校でのフランス語履修者が増え、センター試験に挑戦しようと志す生徒が増えることは喜ばしいことである。

次に、平均点に目を移すと、151.04（平成28年度）→142.60（平成29年度）→134.83（平成30年度）→138.64（平成31年度）→138.41（令和2年度）という結果となっている。母集団が少ないことで、一人一人の得点が平均点に顕著に表れたと考えられる。

出題形式については、前述のとおり、ここ数年の形式を踏襲している。内容についても発音、文法理解、読解力、情報収集力など、それぞれの基礎、応用を見るのにバランスの取れたものだった。例年高等学校教科担当教員から要望された蓄積をうまく生かし、高校生のライフスタイルに合った良問だった、と言える。難問や奇問で生徒のフランス語力を測るのではなく、ごく自然な形で彼らの力を測れたのではないかと思う。一見易しそうで、しかし、基礎からよく理解していないと、よく読めていないと解けない、あるいは誤答してしまうような問題も多かった。

報告の方針

今回の報告は、上記の点を踏まえ、次の4点を分析の中心とする。

- (1) 受験者の実力差を判定できる試験となっていたかどうか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか、ということを中心に検討したい。少人数の集団が対象であるだけに、その点に関しては大人数の科目以上に要求が強いと考える。
- (2) 特定の要素に偏らない、総合的な学力を問う問題であったかどうか。
- (3) 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。
- (4) フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。

2 試験問題の内容・範囲など

第一外国語としてフランス語を選択学習する高校生の学習環境の変化（学習時数の減少）を考慮した作題を希望している。

4年前の第1問の出題数の変化（減少）、第3問の2種類の語彙を問う問題への変化は踏襲され、今年度に出題方法の大きな変化はなかった。

第1問 フランス語におけるつづり字と発音間の規則性を理解しているかを問う問題である。基本ルールを問う問題に限る傾向は望ましい。

問1では語中の-g-の発音を問う問題。問2で鼻母音かどうか、問3で母音の組合せでの音が出題された。出題語はどれも基本語で解答は難しすぎない。問4は語尾の-cの発語の有無を問われたが、発音問題としてはかなり正答率が悪い。選択肢はいずれもフランス語の基本語ではありながら英語経由でカタカナ語化している単語に似ていて (Faux amisの一種)、日本人学習者の誤った思い込みを指摘する注意喚起問題であったと言えよう。正答率の悪さは受験者が曖昧な記憶のままに取り組んだ結果であった。

問5には毎回リエゾンに関して出題される。今回は「慣用句の中でのリエゾン」と「一般名詞と付加形容詞間でのリエゾン」が出題され、形容詞に続く名詞とはリエゾンしない③が正解という基本的な出題であった。正答率も良い。

第2問 語彙と表現を問う問題である。慣用句についてはそれを構成する語句はなじみのある語であることが多いだけに、受験者は思い込みではなく確実に意味を認識する必要がある。(問1のfaire connaissance、問3のà mesure queのような慣用句。)

さて、問2で問われたexprès、問4のcaractère、問5のassister à、問6のuniqueは、英語由来でカタカナ語化している単語に似たものであるせいであらうか、かつに解答する可能性がある。どれもフランス語の基本語ではあり、また多義語という側面にも着目するべきで、思い込みによる誤用を避けるための注意喚起であった。いささかその種の出題に偏っていた感触もあるが、母語で使用する意味と学習中の言語での意味のすれ違いにスポットが当てられた。

第3問 Aは、発音に加えて、形容詞の変化、派生語の知識、動詞の活用などを扱ういわば総合的な文法問題である。問1は形容詞の女性形変化の例外を問う問題、そして3問続けて派生語を問う問題(問2は動詞から形容詞、問3は形容詞から名詞、問4は動詞から名詞)、問5は直説法単純未来の活用形を問うものだった。取り上げられている単語のレベルは中等教育のフランス語学習に十分適合していると思われる。

Bは語彙を問う問題である。問1は形容詞の対義語を問う問題、問2、問3は状況における動詞や名詞の意味を問うもので、平易な表現を用いた基本問題であった。

第4問 文中の空所に適語を入れる形式で、文法や語法の理解度を測る問題。今年度のフランス語試験の中では、最も得点率の低い大問であった。

問1は、空欄に続くétonnantの理解により正答に至る問題。問5も①apprenantを正解とする問題で、等しく現在分詞が直前の名詞にどのように働くのかの理解が問われた。日本語の「驚く」とは方向性の異なるétonnerを扱った問1はとりわけ難易度は高く、理解の深さを測る良問だった。

問2は関係代名詞の問題だったが、正答率の低さは群を抜いている。理由は、関係節中のquitterの理解の低さであり、意味の似ているpartirの構文との混同と思われる。先行詞が場所を表す語である場合、迷わずoùまたはd'oùを選択してしまう、学習者のよくある傾向を際立たせる問題であった。

問3は接続法を要求する表現について、問4は疑問代名詞lequelと最上級表現、問7は否定表現中の冠詞のde、問8は中性代名詞についての問いで、正答率のかなり悪いものもあったが、基本事項を扱っている適切な問題であった。

問6は他の選択肢のおかげで、正解は②de mêmeか④tantかの2択になっているとはいえ、選ぶべき表現のtant queは多義語として学習者には厳しい出題であり、一方のde même queは基本語とは言えず、難問だった。

第5問 対話文を完成させる問題であり、これも例年どおりの出題であった。作問には手間と時間を掛けている様子がうかがわれる。受験者がシチュエーションを汲めればトラブルの少ない

問題であろう。実際、使われている語や表現は基本的なものが大部分であった。正答率の低い問2は、空欄直後の肯定的なあいづちに合わせたつむりの「？」で終わる④を選んだ可能性があるが、落ち着いて読解することで正答に至る。

四技能の総合的な育成が求められている中で、会話体としての出題にもますます工夫がされていることと推察する。出題文の中に、従来のフランス語らしからぬ表現として名詞と名詞をつなげた表現も（問1のle billet retourや、une place côté couloir）、現代フランス語として定着しているという理由で出題されたが、基本語という手掛かりから受験者が理解を進められるレベルでの出題にとどめていただけるようお願いする。

第6問 情報処理能力を問う出題で与えられた情報から判断し発信できるか問われている。

A 「不動産会社が公開している空きアパートマン情報」とそれについての会話を読み取る問題であった。平易な会話表現で正答率も良い。高校生のこれまでの人生では経験し得なかった状況かもしれないが、資料が的確に提示され取り組むことができた。

B 「ハイキングの参加案内」が出題され、有料でハイキング参加者を募る設定を読み解く必要があった。正答率の悪い問題もあったが、内容を汲む以前の思い込みによる間違いと思われる。

第7問 文意を捉えられているかの理解レベルを細かく測ることができる長文読解問題である。

全体の中では難問である。今回は「スピード写真」が題材だった。100年前の誕生の状況や、戦後の商業施設での商習慣や人の気持ちの変化がその普及を後押ししたことなど、新しい話題に受験者は関心を持って取り組んだことだろう。問3の選択問題は、「一致しないもの」を選ぶというところで注意が必要であった。問1、問2、問5の空所に適語を入れる問題はどれも動詞を問う出題であったが、全体を読み取って正解に達する設問であり、作問に工夫のある良問であった。

第8問 和文仏訳で、自らの考えを述べる自由作文の前段階として文法や構文を中心とした作文力を問う問題である。並べ替えの語あるいは語句の単位は6個、問うのは4番目の語（句）というルールで統一されている。日本語とフランス語の間の発想の違いが問題のポイントになると難易度が上がる。そのような問題にあたる問2にしても、主語が提示されていることで「音楽家の名前」までは容易に作文できるので、基本語direを丁寧に扱えば正解に至る。全体的に、基本的な表現の出題だったと評価する。

3 結 び

前述でも述べたが、例年どおり難問奇問はなく、また特殊な文法的例外もなく解き易く、長文も難解ではなく親しみやすいもので、純粋にフランス語力を測れた問題であった。

前項の問題の分析でも触れているが、今回のセンター試験で幾つかの特徴的なことがあった。

- 1 「和製英語」あるいは、「日本語の中で英単語の意味で定着しているもの」とフランス語の意味と取り違えそうな表現が出題されたこと。
- 2 高校生が体験できない状況でも資料、図が的確に提示されていれば、必ずしも答えられないものではないこと。
- 3 会話については、比較的正答率が高かったこと。

1については、英語を同時に学習している生徒にとっては、自分が学んでいる言葉についての自覚をしっかり持たせ、二つの言語の共通性、違いを認識させることが大切であること。複言語を学ぶ者にとっては常に重要なことであること。フランス語教育に携わる者として、これからも力を入れなければいけないところである。

2、3については、会話に充てる授業時間がより充実し、生徒たちが会話表現に慣れてきた結果と考えることができる。

今年度の受験者数が微増したことに関して、はっきりとした原因は分からない。数年前に起こった「センター試験からフランス語入試がなくなるのではないか」という不安、情報不足がある程度の落ち着きを見せたのかとも思う。しかし、一部の国立大学で二次試験のフランス語が廃止されたり、大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）における英語以外の外国語に対する情報量の少ないことなどは、高校生や外国語の選択に迫られる中学生にとって大きな不安材料の一つであることは間違いない。英語以外の外国語を学習していることが、大学入学の際の不利な材料になってしまうこともある現状が、日本の将来にとって残念でならない。

大学によっては早期入試の形で門戸を開いていただいているが、少ない受験者のために一般入試の作問、採点をするのは、コストを考えると負担が大きいと聞いた。そのような場合は、このセンター試験（以後は共通テスト）を利用する可能性を、改めて御検討くださるようお願いする。作問者の先生方は、高校の学習指導要領もなく、到達度も明確にされていない中で、受験者の実力を的確に測るために良問を作問してくださっている。複言語を学ぶ学習意欲の高い高校生たちを、大学受験の場面で門前払いするような事例が減っていくよう望む。

なお、センター試験の質の高さは、長年、作問者と高校教育の現場の教員との情報交換の場が設けられてきたことによる。出題側が高校生の現状を知らないまま作問し自己満足で終わってしまう危険性を回避できる、良い仕組みだったと思う。共通テストにおいても、高校教育の現場の声を是非取り入れる仕組みを存続させていただきたい。

また、外国語は「英語だけではない」というモチベーションを持った生徒たちに対して、共通テストの情報を豊富に早急に提供すること、フランス語だけではなく、他の外国語も共通テストにおいて、今までどおり、実施されることを切に希望する。

第2 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

従来の方針を継承しつつ、近年の部会での議論や経験を踏まえて問題作成に当たった。すなわち、日本における高等学校の「フランス語」教育の現状を考慮した上で、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の出題方式において可能な限りフランス語能力を総合的に判定できる問題を作成することを目指した。

更に、問題作成部会のこれまでの作題経験と合わせ、点検委員会から寄せられた意見、及び大学入試センターから全般にわたってなされた指示を尊重するとともに、令和2年度センター試験に対する高等学校教科担当教員（以下「高校教員」という。）からの意見、要請等についても、有益なものを取り入れるよう議論を尽くした。

以上の方針に基づき、具体的には次の点に特に留意しながら作題を行った。

- (1) ほとんどの受験者が正答すると予測されるような、極端に易しい問題を排除するように心掛けるとともに、著しく難しい問題も避けた。その上で、できるだけ基本的知識の応用によって正答が得られるように工夫した。
- (2) 文法問題は、できる限り多様な出題を心がけた。
- (3) 長文問題については、基本的に近年の方針を踏襲し、全体的になるべく自然な表現、なじみやすい題材を選択した。テキストがあまりに長く複雑になることのないように十分に吟味し、修正を重ねた。他の問題でも扱えるような文法問題や、選択肢だけを見れば分かるような単純な語彙問題を避け、全文を注意深く読み、一貫した論理の流れを理解していなければ解けないような問題の作成を心掛けた。また必要に応じて図表等を用い、日常生活に関連したフランス語の運用能力を試すための問題を作成した。
- (4) 選択肢の配列については、基本的にアルファベット順ないし50音順を採用した。
- (5) 使用する語彙と表現については、受験者が当然知っているべき基本語を選択した。なお長文問題において、上述の基本語の範囲を超える語彙を用いる場合には、注を付けることとした。
- (6) フランス語の表記については、最近の傾向を踏まえ、また受験者に分かりやすくとの配慮から、大文字にもアクセント記号を付けている。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 発音問題

・出題意図

近年の出題傾向にならい、「聞く・話す」能力の基礎となるフランス語の発音に関する基本的知識を問う問題を出題している。辞書において複数の発音の可能性があるものは避け、つづり字と単語の発音についての理解度を試すために、多様な出題を心掛けた。平成28年度から、これまで7問の問題数であったものを5問にし、基本的に知っているべき事柄を厳選して問うこととし、語彙の点からも日常でよく使われる極めて基礎的なものを選んでいく。基本的な発音の規則を正確に把握していれば容易に正解に到達できるものと思われる。

・解答結果

問1は「g」の発音を問う問題であり、正答率は高く、十分な識別力が出ている。問2はつづり字「ain」「ein」の発音を問うもので、正答率は高く、識別力も問題なかった。問3はつづり字「au」「eau」「eu」「o」の発音を問うもので、正答率は高く、識別力

は十分であった。問4は「c」の発音を問うもので、難解な問題ではなかったが、正答率が低くとどまり、意外につまずきやすい問題であったようである。問5は例年どおり、リエゾンについて問う問題である。正答率は高く、識別力も十分であった。

第2問 語彙と表現の問題

・出題意図

例年同じ形式で出題されている、成句、慣用句表現、語義を理解しているかを問う問題である。いずれも基本的な表現を中心にした問題であった。日常的なものを中心に、語彙と表現をバランス良く配置した。

・解答結果

問1は慣用表現 *faire connaissance* の意味を問う問題であった。正答率が高く、識別力も十分な問題となった。問2は副詞 *exprès* の意味を問う問題であり、やや解きにくい問題であったのか、正答率は低かった。問3は慣用表現 *à mesure que* の意味を問うものであり、やや難しかったかもしれないが、識別力は十分であった。問4は名詞 *caractère* の意味を問う問題であり、正答率も識別力も高い結果となっている。問5は *assister à* という表現の意味を問う問題だったが、つまずきやすい問題で、正答率がやや低かった。問6は *filles uniques* という表現の意味を問う問題であり、やや難しかったようだが、識別力は高く出ている。

第3問A 語形変化と発音の複合問題

・出題意図

フランス語の様々な語形変化に関する知識と、つづり字・発音に関する知識を複合的に問う出題形式である。本問の設定形式は一見複雑に見えるが、例題の変形パターンを理解すれば、受験者にはそれほど難しい問題ではないと思われる。

・解答結果

第3問Aは、全体的に識別力の高い問題であった。動詞 *admirer* から派生した形容詞 *admirable* を問う問2は、規則的な変化の知識を問う問題であったため正答率が非常に高かった。一方、形容詞 *favori* の女性形 *favorite* を問う問1と、動詞 *louer* から派生した名詞 *location* を問う問4は、それぞれ例外的な変化であったため正答率が低かった。受験者には、このような例外も着実に覚えてもらいたい。

第3問B 語彙の問題

・出題意図

平成28年度より新設した語彙問題である。同義語や反意語、または関係性が同じものを例より類推して解答する問題である。

・解答結果

小問ごとに正答率のばらつきが見られた。問2は正答率が6割程度にとどまったものの、識別力に優れていた。基本語彙を様々な角度から学習してきた受験者であれば容易に正答にたどり着くことができたように思われる。

第4問 文法の問題

・出題意図

基本的なフランス語表現と文法事項を広く問う問題作成を心掛けた。また、他の問題と同様、問題文については、具体的な発話の場面をイメージしやすい自然なフランス語になるよう配慮した。

・解答結果

今年度の試験の中では最も正答率の低い大問であった。特に、関係代名詞を問う問2は正答

率が3割に満たなかった。これは、先行詞le quartierが従属節内の動詞quitterの直接目的語であるということ我问うものであったが、oùやd'oùを選択する受験者が多かったためである。また、問7は否定表現の中の冠詞deを問う問題で、正答率が3割程度にとどまった。接続詞を問う問6も正答率が5割に満たなかったものの、成績上位層はよく答えられており、識別力の高い問題であった。いずれも語彙の深い理解と基本的な文法事項の習得度を問う問題であった。

第5問 対話完成問題

・出題意図

例年の出題傾向どおり、与えられた会話の一部から、自然な状況を判断し、対話を完成させる問題である。フランス語圏での滞在経験がなくても想像しやすい場面設定を心掛けた。また、できる限り平明なフランス語による表現を採用した。更に、A、B、Aの会話において、最初のA、Bだけを読んで正答が導きだせるような問題ではなく、A、B、Aの会話全体を読まなければ正答に至らない問題を作るよう努力した。

・解答結果

問1は、会話の展開を丁寧にたどっていけば、比較的容易に正答に到達できる問題であった。問2は、識別力はあるものの、正答率が約5割しかなかった。④が誤答として多く選ばれたが、これはAの返答にある« Oui »が疑問文に対する返答と理解されたためである。問3については、会話の展開を慎重にたどれば、正答に到達しやすい問題であった。問4は、正答率が高かった。「il ne fait pas trop froid?」という発話から、服装が容易に連想できたためであろう。問5は識別力があつたものの、誤答である②を選んだ受験者が多かった。その理由として、最後のBの返答にある« Il parle français parfaitement »の« Il »を選択肢中の« votre fils »と結び付けた可能性が考えられる。

第6問 資料・会話読解問題

・出題意図

日常生活に関連したフランス語の運用能力を試すことを目的としている。AとBの中間に分かれ、別々に示された図表と会話を関連付けながらフランス語の資料を読み解く能力が求められている。Aは「不動産会社が公開している空き物件の情報」、Bは「ハイキングの参加案内」を読み取る問題で、バラエティのある出題となるよう工夫をこらした。

・解答結果

Aについては、受験者にあまりなじみのない題材であるものの、全ての問題において識別力があつた。資料を的確に読み解けば正答に至ることのできる問題であった。

Bについては、おおむね正答率が高く、識別力も保たれていた。問2は正答率が6割に満たなかったが、成績上位層に関しては正答率が極めて高かった。問3はほとんどの受験者が正答しており、資料を正しく読み解けていることが示された。

第7問 長文問題

・出題意図

第7問は、例年の方針を踏まえて、過度に抽象的な論説調の文章を避けつつ、今年度は、「スピード写真」に関する文章を題材に作題した。作問に当たっては、例年の作題方針を踏襲した。事柄の因果関係や対立などを正確に読み取る力や、文章の流れを論理的に確実にたどる力を問うことを主眼とした。一般常識だけで正答が導き出せる問題や、単語や成句の知識のみを問う問題は避けるよう留意した。文章全体の意味を把握する読解力、論理展開にふさわしい適切な語や表現を選択できる総合的な思考力・判断力を試すよう配慮した。

・解答結果

第7問は全体的に見て、識別力のある良問であった。問1・問2は文脈を正しく理解したうえで動詞を当てはめる問題であり、いずれも正答率は約7割で、識別力も高かった。問3も識別力のある問題であった。正答率は約5割にとどまった理由は、本文の内容と一致しないものを選ぶという問題形式によるものであろう。とはいえ、文章の内容をしっかりと理解した成績上位層は正答を導くことができていた。問4の正答率は約9割で、識別力はやや低かった。その理由としては、日本語による出題であり、正答が導きやすい問題であったためと思われる。問5は識別力が非常に高い問題であった。十分な語彙力を有する受験者ならば、選択肢中の *dissimuler* や *accuser* など比較的難度の高い語彙に惑わされることなく正答できたものと思われる。問6は本文の内容と一致する文を六つの選択肢から二つ選択する問題である。正答率は約6割で、比較的難度が高い問題であった。⑥を選んだ誤答が多かった理由は、代名詞 *eux-mêmes* が指す対象を十分に理解できていなかったためと考えられる。

第8問 整序作文問題

・出題意図

例年どおり、与えられた語句を用いて、フランス語として自然な文を組み立てる力を問うことを主眼としている。問題文の日本語は、具体的な発話状況が容易にイメージできるような文にし、解答のフランス語とかけ離れたものにならないよう配慮した。

・解答結果

quand + 単純未来の文を組み立てる力を問う問1、*dire* を用いた表現の理解を問う問2は、いずれも正答率が高く、識別力も十分であった。問3は関係詞 *où* の用法、問4は *rempli de* という表現の理解を確認する問題で、いずれも適切な難易度の問題であった。問5は、*à* + 不定詞を用いた文を作る問題で、やや解きにくい問題であったようだが、識別力は十分であった。

3 ま と め

以上、高校教員及び関係各方面から寄せられた意見、令和2年度の「フランス語」の出題意図、問題形式と内容に触れながら、解答結果を分析検討し、問題作成部会としての見解を述べた。

今回の試験も、識別力の高い問題が多く、全体として幅広い受験者層に的確に対応できており、平均点も例年並みとなった。今後も試験の目的に鑑み、高等学校における学習範囲を逸脱しない適切な出題内容を心掛けつつ、極度に難易度の高い問題や、出題傾向の偏りを避ける配慮を継続していかれることを望む。

試験問題に対しては、高校教員の方々をはじめ各方面から有益な意見を頂いた。心から感謝したい。寄せられた貴重な意見を、今後の問題作成に生かしていくことを期待したい。